

2025年度 海外研究員成果報告書
人間力創成教育院 准教授 大橋岳

出張期間

2025年4月13日 ～ 2025年4月30日
2025年7月1日 ～ 2025年7月17日
2025年7月30日 ～ 2026年3月19日

研修先 Forestry Development Authority, Republic of Liberia(リベリア共和国森林開発局)
Whein Town, Mt.Barclay, P.O.Box 3010, Monteserrado County, Monrovia, Liberia

研究課題 野生チンパンジーの生態と文化の解明

研修成果

2025年4月から2026年3月まで、リベリア共和国ニンバ郡パラに滞在し、野生チンパンジーの生態学的調査を実施した(2025年5月から6月までは科研費の支援によるが、通年でデータ収集方法は統一して実施した)。西アフリカに生息するチンパンジーは、石を用いたナッツ割り行動などユニークな道具使用行動が知られており、注目を集めている。一方で、違法な狩猟や過度な森林伐採が横行しており、近絶滅種に指定されるほど分布域や個体数を減らしている。チンパンジーは、自らの存在を脅かす人間を極度に恐れるため、直接観察が難しい。1970年代から継続されている二つの長期調査地を除くと、周辺国においてもそれらと比較可能なデータの入手は困難な状況にあった。申請者が2012年から本格的に開拓してきたリベリア共和国パラは、行政による保護区ではないが、チンパンジーを伝統的な宗教観のもとで狩猟の対象としていない。そのため、十数年にわたる調査の蓄積を経て、直接観察が次第に可能となっていた。近年は8月や2月に限って調査をおこなってきたが、本研修により通年での調査が可能となった。

通年の調査により、季節変化に伴う森林内の果実生産およびチンパンジーの採食品目の変化、遊動域や遊動パターン、さらに地域住民の生業(焼き畑や狩猟)の年内変化について把握することができた。チンパンジーの行動については、長期調査地であるギニア共和国ボッソウとの違いを、とくに採食品目において検出することができ、彼らの行動の可塑性や文化的行動の特徴に関する理解を深めることができた。また、人と野生動物が同一の環境でいかに共生し得るのかという課題についても、地域住民の生業を一年を通じて観察することで、西アフリカにおける人と環境の関わりや自然へのインパクトを実感をもって捉えることができた。

本研究は、研修先であるリベリア共和国森林開発局に加え、ギニア共和国ニンバ山生物多

様性研究所との共同により実施した。リベリア共和国森林開発局は国内の保護区において野生動物のモニタリングを実施しているが、保護区ではないパラでの調査にスタッフが参加することで、焼き畑など地域住民の活動が存在する状況下における保護対象動物の保全について、ともに検討する機会となった。また、森林開発局スタッフと地域住民とのコミュニケーションの場を頻繁に設けることができた。ギニア共和国ニンバ山生物多様性研究所は隣国の研究機関であり、同研究所からもスタッフの派遣を受けることで、国境を越えて遊動するチンパンジーに関する共同研究体制をより強固なものとすることができた。同研究所は2025年にボツソウ環境研究所の改組によって新設された機関であるため、調査開始時には新所長とともに駐ギニア日本国大使と面談をおこなった。また、リベリア滞在中も新所長との連絡を密におこなった。研究成果の一部は、同研究所主催のシンポジウムに招待され、ギニア共和国ローラにおいて発表した。さらに、共同研究の成果の一部は、マダガスカルで開催された国際霊長類学会大会において、リベリア共和国森林開発局およびギニア共和国ニンバ山生物多様性研究所のスタッフと連名で口頭発表をおこなった(7月18日から29日まで、科研費の支援を受けて出張した)。

本研究を実施するにあたり、研修先として受け入れてくださったリベリア共和国森林開発局には心より感謝申し上げます。また、ギニア共和国ニンバ山生物多様性研究所には隣国へのスタッフ派遣など多大なるご協力を賜り、深く御礼申し上げます。